

特集：産学連携による教育システム情報学の価値創造と今後の展開

教育・学習支援システム研究分野における 産学連携・共創への道標

松浦 健二*, 柏原 昭博**

A Guide for Academia–Industry Collaboration of Research and Development in Education and Learning Support System Fields

Kenji MATSUURA*, Akihiro KASHIHARA**

This commentary article encourages and navigates inexperienced readers to IAC (Industry–Academia Collaboration) in the field of education and learning support systems. It includes a survey of IAC history, major patterns thereof and recent activities in JSiSE. A major pattern of IAC in engineering field is technology transfer from one another but there are other possibilities in this multidisciplinary community, for instance, that is collaborative project for education/learning support practice. In any cases, the community members taking either role in industry or academia should clearly be aware of the necessity and impact on working together. They would be able to play a role in covering both R&D innovations and practical innovations in education and learning.

キーワード：産学連携・共創，共同研究，連携教育

1. はじめに

教育システム情報学の取り扱う研究対象領域は広く捉えられる。教育・学習が行われる場の例には、高等教育機関を含むあらゆる学校教育で行われる授業や研修、地域社会でのコミュニティ・スクール、塾や予備校などの学校以外での教室やオンライン講座、音楽などの芸術やスポーツなどの習い事、企業内教育や特定技能研修など、その目的・目標に即したさまざまな対象が含まれる。さらには、直接的な教育・学習の目的でなくとも、学習者の履修支援や研究室運営支援、キャンパスライフ支援といった間接的な支援や、通勤・通学などの移動途中でのクイズや学習コンテンツの提示など、直接・間接を問わず学習喚起が行われるあらゆる場面・文脈に教育システム情報学は貢献できる。

その強みには、(i) 技術的な定義に留まらない広義の情報システムを研究する側面、(ii) 情報システムやその提案手法を教育・学習に実践適用する側面、(iii) 人間同士の関係性に根差したサイバー・リアル両面での社会構築や組織の改善に寄与する側面が含まれる。これらの各側面で産業界と学術界との間で、いくつかの連携・協調の方向性が考えられる。

教育・学習文脈での情報システム研究は、(i) の成果ともなる試行段階に留めず、学術的な意味における再現性の下で、(ii) の成果となるような実践寄与が果たされるべきである。ただし、その間には大小埋めねばならないギャップがあり、その補間は典型的には研究実施組織以外の関与者が介在する。そこも実現の方法論が整理できれば、(iii) の研究成果となる可能性がある。

* 徳島大学情報センター (Center for AIT, Tokushima University)

** 電気通信大学大学院情報理工学研究科 (Graduate School of Informatics and Engineering, The University of Electro-Communications)